

生涯学習だより



実心～「実りが育む【あき】…実りに感謝」

～かみしほろの健やかな育ち～

年間テーマ 「わが町の教育」

私の高校生の思い出(その二)



高校三、四年生になると車の運転免許を取得して、車で通学する先輩や同級生が居て毎日二、三台は学校の玄関口にありました(今では考えられない)。

社会情勢も大きく様変わりして農耕馬からトラクターへ、搾乳も手搾りから機械化(ミルカー)となり、一般の方も車を持つようになりました。

農業科の生徒は後継者が多く、三、四年生になると実習が多かったと思います。

農業機械(トラクターなど)や酪農家などの先進地視察が楽しみでした。搾乳はスタンション方式からフリーストールへ変わり規模拡大が始まりました。(田中 松雄)

英語が大好きだ

英語が大好きだ。だから英語を勉強することが何の苦にも感じない。音楽も大好きだ。ラジオから洋楽が流れると、自然に体がリズムをとる。



小学校三年生の時、テレビでマイケル・ジャクソンの「スリラー」を見た。怖さとカッコよさで強烈に印象に残った。その後すぐ、カセットテープで「スリラー」を含む英語の曲を聴きまくった。歌詞カードを開いては、意味も読み方も分からないまま、聴こえたとおりに何度もまねをして歌った。

中学一年生になり、英語の授業が始まった。意味も読み方も分かる英語が増えていった。家での歌まねがさらにおもしろくなった。

人生の後半にさしかかってなお、英語好きは変わらない。好きなことだから、興味があるから、もっと知りたいから、心地いいから、英語を学び続けたいと思うのだ。

我が子にも英語のおもしろさを知ってほしくて、せっせと催し物に参加させている。

子どもが、英語だけでなく何かを学び始める過程には、「心が動く」ことが必要ではないかと思う。まったく触れたことのない事柄よりも、少しでも見たことがある、聞いたことがある事柄の方が、やってみようかなという気持ちになる。見てみたい、触ってみたい、やってみようという好奇心の目を開かせたい。開いた状態で、読み書き計算の力さえ蓄えておけば、その後の知識の習得は、各自が自ら必要にかられて努力するはず。子どものうちにできるだけ、人と関わり、さまざまな体験をさせておきたい。

テレビで、大学卒業を間近に控えて、やりたい仕事が見つからないという、東大生のインタビューを聞いて、ますますそう思うこの頃である。(杉森 恵子)

ピンチはチャンス

私は情報委員を受ける時に、年二回の原稿を書くと言いました。その時、何となくテーマがすでに頭に浮かんでいました。ひとつが、春号で書いた「北門小学校閉校と土幌移住」。そして、もうひとつが「ピンチはチャンス」です。でも、その時は今の自分から思うと、軽い気持ちからのものでした。

私はその後、ある知人から何度も「ピンチはチャンス」という言葉をかけてもらい、大袈裟ではありますが、人生最大の落ち込みから救いの手を差し伸べてもらうことになったのです。

私が始めに書くこうと思っていた内容です。私は六人の子どもがいて十八年間、外に出る機会が殆どなく、家業と育児をしていました。育児やずっと家にいることのストレスの発散をしたい、出産育児で酷使してきた身体を健康にしていきたい、という気持ちが、ずっとありました。六年前に、たまたま町内で受けた体操教室の先生が、毎週土幌に来てくれることが可能と知りました。もしかしたら、私と同じような思いを持っている方が他にもいるかもしれない、と思って保健福祉課に相談。協力を得て体操教室サークルを立ち上げました。当初は、なかなか会員さんが増えずに「思い違いだったかな？」と考えた時もありましたが、二年目ぐらいから口コミでどんどん増えました。やってみて良かったと思いました。

一年程前に、あるきっかけで、学生の頃にやっていたけれども、結婚してから途切れていた英会話を、また勉強しようと思いました。ラジオとテレビで勉強を始めましたが、英会話を話す場所が必要だと思いました。またもや、土幌で同じ思いをされている方がいるかもしれないと思い、知人と意気投合したこともあ

り教育委員会に依頼。タイミングよく話が進んで、みんなで集まって英会話をできる会を催してもらっています。

土幌は町民の声を反映して下さる良い町です。私ができなかったこと、やりたいことを声に出したら反映して下さいました。

この内容で「ピンチはチャンス」とお伝えできればと思っていました。英会話をしたいと思った同じ時期、下の子どもが少し手が離れてきて、生活や気持ちにゆとりが出てきました。勉強をして資格を取ったり、今までやりたかったけどできなかったことをどんどんしていきました。その時の自分は全部できると思っていました。

ところが、今まで楽しみにしていたことが苦痛になったり、上手くいっていたことが上手くいけなくなりました。そして周りの人や家族まで巻き込んでいきました。私は、心の迷路から抜け出せなくなってしまうしました。

その時、知人から「ピンチはチャンス」という言葉を何度もかけてもらいました。数人の知人が、同じ意味合いの言葉を繰り返しかけてくれました。何度もかけてもらっているうちに、暗闇の迷路から出口の明かりが少しずつ見えてきました。今回、人を思いやる気持ちや、自分を大事にすることの大切さ。そして何よりも困った時には手を差し伸べてくれる人や家族がいることを改めて知りました。

「ピンチはチャンス！」

これからも自分に、そして困っている人がいればその人に、声をかけていきたいと思えます。

(森田 久美)

ユネスコスクールのこと

横浜市立永田台小学校へ行ってきました。学校長の住田昌治先生に、今年の十一月二十二日に上土幌中学校で行う研究大会の講師として来ていただくための打合せが目的です。

先方の学校からはせっかく来るのだから、読み聞かせをしてほしいということで、結局午前午後八クラス（笑）、読み聞かせもしてきました。

さて、今回住田先生に来ていただくことと決めたのは、住田先生の学校が、ユネスコスクールの日本有数の実践校だからです。

ユネスコスクールは、上土幌高等学校が本町の他の小中学校に先駆けて認定されています。かみしほろ学園構想の流れの中で、こども園や小学校、中学校もユネスコスクールの認定を受けて一体で進めていこうという確認がなされています。

ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校です。そのベースにある考え方は、ESD（持続可能な開発のための教育）というものです。簡単に言うと、激動の社会の中で、みんなが平和で幸せに暮らし続けていけるようにしていくために、みんなで考え続け、自己変容していける教育の在り方を考えようということです。

持続可能な教育・活動というときに、自然保全や平和活動、資源リサイクル運動などが思い浮かびます。そうした個別の中身に目がいつてしまうけれど…ま

ず学校や町やそこに関わる人たちの思いや行為が「持続可能」であることがとても大切です。ですから持続可能な授業づくり、部活動運営、学校づくり、そして地域づくりをみんな目指していこうというのが、かみしほろ学園構想の根っこに流れる考え方になればとてもステキです。

学校も社会もこの十数年の中でなんだかとても忙しくなりました。夜中まで不夜城のように学校の電気がついて教員が働いているなんてことも普通です。さまざまな職種でも深夜までブラックに働く状況が方々で問題になっています。でも、そうではなくて、みんなが普通に無理なく暮らし続けていける社会が、みんな幸せな社会のはずです。それを教育の視点から実現していこうというのが、ユネスコスクール（＝ESD）の願いであると思います。

永田台小学校では、先生方の多くは、定時で帰ります。でも平素の授業も充実していて、子どもたちの笑顔がはじけています。学年だよりは学校だよりで一本化されており、通知表の所見欄も短くなっていく代わりに保護者が日常的に学校に来て担任とおしゃべりしています。ステキだなあと思いました。

かみしほろ学園構想が進んでいくことで、大人から子どもまで上土幌で暮らして学ぶすべての人たちが、今よりも持続可能な形で学び続けていけるようになります。

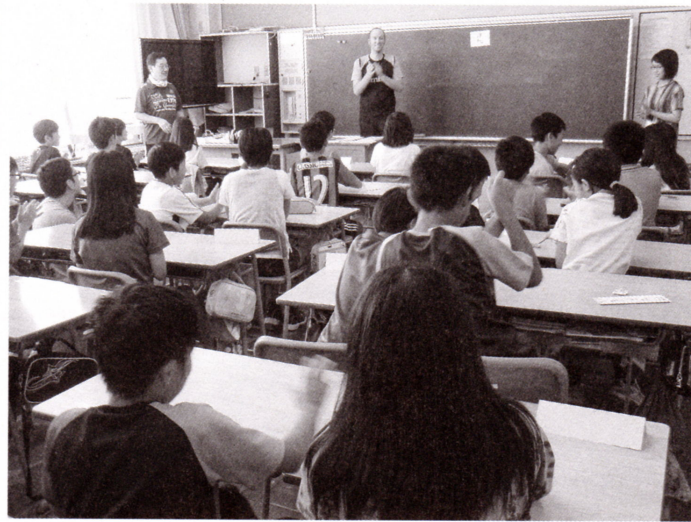
そのために住田先生の提案がきつと役立つに違いない、とそう感じて横浜から帰ってきました。

（石川 晋）

広がれ！ティームティーチング！

子どもが小学校に入学し、初めてTTという言葉聞いた。上土幌小学校には、担任の他にTTという先生が存在し、人数が多い。教員は総勢三十人を超え、教室には、常時三〜四人の先生がいる状態である。私の子ども時代は、教室には担任の先生が一人だけ。時々、副担任という先生がピンチヒッターで現れるという環境だったため、子どもたちの教室に入ると、少々の違和感を覚える。しかし、先生が多くて悪いことはない「何かが手厚いのだろう」と、ぼんやりと思っていた。

ある日、下の娘が「おじいちゃん先生大好き！運動会の踊りのね、つっぱりハイスクールロックンロールを一番上手に踊るの。テストの時もね、こっそり聞くと、指で空中に書いてくれるの。テストの答えだよ！凄くない？」と興奮しながら話した。そういえばと、定年を離れた先生が、下の子のクラスに、TTとして配属されていたことを思い出す。



おじいちゃん先生は、一緒に歌い、一緒に踊る、一緒に体操もして、遊びに誘えば断らない、走れば自分より早く、オニを交代してくれるなど、とても優しい。たまに会い、お小遣いをくれる自分のおじいちゃんしか知らない娘に、六十代のおじいちゃんというには若い年代の、その何気ない姿が、新鮮に映っている。度々、おじい

ちゃん先生の武勇伝が、我が家の食卓を飾る。話を聞くたびに、その存在にありがたみを感じ、家族は温かい気持ちになる。せつかく高齢者の多い町なのだから、もつと子どもたちと高齢者が触れ合える環境や、もつと高齢者が先生になれる場所があっても良いのかななどと、高齢者を敬う気持ちだが、私にも蘇る。

上土幌町は、海外交流も盛んな町である。この数年、外国人が教育委員会に席をおき、広く英会話を教えている。何となく知ってはいたが、英語を話せない私にはなじみが薄く、子どもたちからは「あの先生、日本語が話せないから」としか聞いたことがなかった。その外国人先生も、形は違うが、TTの一人となっている。早速、秋の参観日で、上の娘の英語の授業が見られるという。

日本語を話せない外国人先生は、授業にも英語しか使わない。聞き慣れたクジラの単語の「ホエール」も、私の耳には聞き取れない。しかし、そんな私も、リズムの良い授業に、どんどん引き込まれていく。ゲーム方式で進む授業に、勝った負けたと、思わずガッツポーズで、立ち上がる子どもたち。英語だけの空間に、歓声上がる。生きた英語教育を目の当たりにし、驚くと同時に胸の高鳴りを感じる。このような授業を受けられる子どもたちを、うらやましく思う。

『TTとは、ティームティーチングの英語の頭文字を取ったもので、複数の教員が役割を分担し、協力し合いながら指導計画を立て、指導する方式のことで、チームの教員一人ひとりの特性を最大限に生かす体制である。』と記されていた。

先生の人数は、TTも合わせるため、本当に多く感じる。しかし、このたくさんの先生との出会いが、子どもたちの視野を広げていく。その個性に自身の可能性を重ね、知らず知らずに人生の選択肢が増えていく。TTという教育方針に、授業を見て納得し、話を聞き、この教育が確かに子どもたちへ届いていることを、実感している。今後も、もつともつとTTが、広がっていくことを、期待している。

(西垣 知子)